
カメラは嘘をつかない

くらいしす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

カメラは嘘をつかない

【Nコード】

N3852M

【作者名】

くらいしす

【あらすじ】

カメラを常備する空好きな男の子と
乙女とは言い難い女の子の話

屋上ではゆっくりと時間が過ぎるけど
気持ちは止まってはくれない。

女の子は初めての「好き」に戸惑ってしまっ。

そのいち・初会話

し字型に並んだ古びた1号館ときれいな2号館の細い隙間。

そこを埋めるように伸びる小さな螺旋階段を四階分のぼりきる。

目の前の錆び付いた扉を全開にした。

すると、その小さな屋上には先客がいた。

あぐらをかいてど真ん中でカメラを構えている。

一眼レフのレンズは静かに前後する。

あの急な階段を登ってこんな狭い屋上に来る物好きが、自分以外に
もいたなんて。

物好きは天然パーマのせいかな、ホワホワした頭を風になびかせながら、
ずっと一眼レフを覗きこんでいる。

・・・どうしよう。

私のいつもの特等席は物好きが今座っている場所だ。

しかし端っこで寝転ぶのは好きではない。

そんなことを考えていると物好きがこちらに気付いたようで、一眼
レフを膝に置きくりと顔を私に向けた。

無気力なぼーっとした目と真一文字に結ばれた口はただ私を見てい
た。

数秒して物好きはカメラに意識を戻した。

－まあ悪い人じゃなさそうだし、後ろにお邪魔するか。

私はレンズを覗きこんだままの物好きに近づいた。

そして手を伸ばして届くか届かないかの距離でその後ろに寝転がっ
た。

物好きの背中には動かない。

よかった気にしてないみたいだ。

私はほっとしていつものように手を頭の下に組み、まぶたを閉じた。

- - カシャッ -

目を開けるとレンズが私を見ていた。

物好きが顔からカメラを下げ、私の目を見た。

「・・・。」

「・・・。」

表情が変わらないので感情が読み取れない。。

私は率直に聞いた。

「何撮ってんですか。」

「キレイだったから。」

間髪入れないものの好きの答えになっていない返事に、私は赤面してしまった。

顔が赤くなるなんて何年ぶりだろうか。。

- つづく -

それに・小さな変化

鐘が鳴ります。キーンコーン
教室を出て、ガラッ
階段を登って、スタタタタ
扉を開けます。バンッ

「よ。」「よ。」

私と涼は互いに手の平を見せ合う。

・あれから物好き、涼と屋上で会う度一言一言話していたらなんとなく気が合って

なんとなく仲が良くなった。

とは言っても涼は一個年下なので校舎が別。
会うのも話すのも屋上だけだ。

5

私がいつもの場所に寝転がって、隣に涼が座る。
それが最近の日常。

別にお互い友達がいらないわけじゃないけど、これが1番楽だ。

まだ会って一ヶ月も経っていないのに、ずっと前から知っていたように感じる。

こんなこと思ってるのは私だけかな。

ふと 涼を見てみた。「・・・ん？」

涼は私の視線に気付いてそれまで覗いていたカメラを下ろした。

・・こんなに表情が変わらない人は見たことがない。

涼は会った時もそうだったけど、表情という表情がなかった。私は涼がほんの少し微笑んだところくらいしか見た覚えがない。表情筋がないのかな？

「なんだ？」

「別にー、なんでもな・・」
い、

と言おうとした瞬間、強い風が吹いた。

私一応女なのでもちろんスカートを穿いている。それが無防備にも大きくめくれあがった。

ここで普通の女の子なら悲鳴の一つもあげるだろう。

しかし、私はスパッツという強い味方がある

そして何より乙女心が非常に足りなかった。なので特に何もせず、元に戻るまで反射的に見ていただけだった。

「……。」
私は涼に視線を戻し、なんでもないよ、と言い直そうとしたが

啞然としてしまった。

涼の、ポーカフェイスは崩れてなかった
 だけど目が私の足を見ていて、そして明らかに・・

「涼・顔、赤い・？」

そういって、涼ははっとして

「そんなわけないよ」

と、まるわかりの嘘をついた。

「・・・ぷっ・・・あはははははははは。 あはっ あはははは。」

私も最初はぽかんとしていたが、次第に色々込み上げてきて

吹き出してからはもう笑いが止まらなかった。

表情を変えずに赤面するなんて普通できたもんじゃない。

涼が一生懸命なんか言っていたみたいだったけど私にはもはや聞こえてなかった。

でもおかしいな、そんな面白いと思ったっけ？

笑いが全く止まらない。

涼はひーひー言う私に、ごまかそうとしてだろうか、背中を向けて再びカメラを手にしていた。

- 実はこの時私の感情が、特別なものへと変わっていたのは、自分を含め誰も気付くことはなかった。
というかそれどころじゃなかった。
腹筋が痛かった。

- つづく -

そのさん - 自覚

それからというものの、私は何かと涼に悪戯というか罾というか、仕掛けるようになった。

ポーカーフエイスを崩そうキャンペーンである。

しかし毎日仕掛けていると、さすがに鈍感な涼でもバレてしまう。

さりげなさを装うのは意外と大変だった。

さりげなく激辛おにぎりを食べさせてみたり、

涼のズボンに熱いお茶こぼしてみたり。

- 酷いことばかりだけど -

でも涼はやっぱり無表情のままだった。

どうすれば変わるかなー。

教室で頼杖をつきながら頭の中でぐるぐると作戦を練っていると、

親友が前の席に座り

「ねえっ！

昨日あいつがさー」

と、ニヤニヤしながら惚気話をしてきた。

こいつには中学からの彼氏がいて、今もラブラブな関係を保っている。

うん。すごいと思う。

楽しそうな親友ののろけを話半分に聞いていたが

「・・・でさー私から抱き着いたらすんごい焦っててさ、かわいかったー。」

・・・ん？焦った？

私は焦ると聞いて、涼の赤面した日のことを思い返した。

そうか、涼でもそういうことがあると焦るのか・・・。

じゃあ私が抱き着いたら・・・。

えっ！？

抱き着くっ！！？

何を考えてるんだ私はっ。

頭をぶんぶん振ってリセットしようとした。

ふーっと息を吐くと、親友が不思議そうな顔をしていた、

「どうかした？」

「いや、どうしたじゃないでしょ。あんたこそどうしたの。」

「え？」

「何でそんな顔赤いのよ。」

「ええっ！？赤くなってるっ？」

「なってるなってる」

どうしてだ・・・私は別に涼のことしか考えては・・・

「あ、もっと赤くなった。」

「っ！？」

ま、まさか・・・

私が大変なことになっているというのに、神様は気を効かせてはくれない。

次の授業の鐘がなってしまった。

「げつ。次渡邊せんせいじゃん。じゃつ、その赤面の原因は後でねつ。」親友はささつと自分の席へ戻ってしまった。

原因を知りたいのは私の方だった。。

そう悪態をついたが、ともかく今は顔をどうにかしなければ。。

私は不自然に思われないようにそつと顔をノートで仰いだ。

- 2 時間後

いつものように涼は座っていて、私は寝転がっていた。
否、いつも通りではなかった。

どうしたんだ私。。

さつきから涼の顔がまともに見れない。

入ってきた時も思わず目をそらしてしまった。

今もまだ一言話してない。

「。。どうした？」

涼が空を見たまま聞いてきた。

うつ。。やっぱり気付いてるか。。

そりゃそうだよな、こんな態度に出たら。

「べつ別になんでもないよ？」

「。。嘘だろ。。なんでこっち見ないんだ。」

どうしたいいんだ。

訳なんて話せるはずがない。

返事に困っていると、涼が静かに言った。

「俺が、嫌なのか。」

「え、別にそうじゃなくて・・・」

「じゃあ。なんで何も言わないんだ？」

「それは・・・」

言い淀んでいると

「そうか・・・」

涼は寂しそうな声を出して、止める間もなく出て行ってしまった。

大きな喪失感が、私に覆いかかった。

その日から、涼は昼に屋上へ全く来なくなった。

パターンと、それまでの日常が閉じてしまった。

家に帰りベッドの上でごろごろしていると、涙が出て来た。

涼に、嫌われた。

その事実が予想以上にショックだった。

なんでこんなことに・・・

いつもの屋上が懐かしい。涼のカメラのシャッター音が懐かしい。大して時は経ってないのに・・・

・翌日、私は親友に相談した。

いままで涼のことは特に必要もなかったので言わなかったが、このままでは何も解決しない。

早く、涼に会いたい。

すると親友はあっさりその答えを出した。

「・それって、好きなんじゃん。」

思わず初めは耳を疑った。

私が、涼を好き？

でもよくよく考えてみればそれは当たり前過ぎて、逆に自分がな
で分からなかったのか理解出来なかった。

「仕方ないよ。きつとそんなの初めてだったんだろーね。特にあん
たそこらへんの思考回路ダメそうだし。」

ほくそ笑みながらも、親友は答えを出してくれた。

「で、どうすればいいか……。涼は私のこと嫌いだし……。」

「いやいや、言ってみなきゃ分かんないもんだよ。」

「何を？」

親友はにやけながら小声で言った。

「好きだって。」

私は一気に真っ赤になった。

こんなんでは私は大丈夫かつ！？

t o b e こんていにゅーw

そのよん - 決意

そんなこんなで、私は生まれて初めての告白をすることになった。しかし、涼はもうしばらく屋上に来ていない。

どうやって会えば・

「呼び出すに決まってるじゃん。」

親友はごく普通のことのように言う。

「ど、どうやって。」

「あははははっ。そっかあんた何にも経験ないから分かんないか。」
私には何が面白いのかわからない。

「だから一年の人気トップ10と一緒に居られたのかもね。あんたすごいわ。」

そう。

私は知らなかったけど涼はモテてたらしい。

確かに整った顔だったけど・それ以外は何も思ってたなかった。

「どうやってって、探すしかないでしょ。捜してどこどこに来て下さいって。」

「どこに呼ぶの・・・？」

「んーあんた達ならあの変な屋上でいいんじゃない？人もいないんでしょ？」

「う、うん」

「じゃーさっさと覚悟決めて言っちゃいなっ」

「はいっ」

親友は慣れているようだ。

まあ彼氏持ちだしな。

・でもほんとうに大丈夫だろうか。
ああなんて情けないんだ。

いつもの私はこんなじゃないのに。
恋をすると人はやっぱり変わるのだろうか。

気を重くしていると親友がひとりごちた。

「それにしても・・涼くんも鈍いの捕まえちゃって・・」

「え？何？」

「なんでもー。」

親友は意味ありげな笑みを浮かべていた。
私にその真意は分からなかったけど。

数日、下駄箱の前に立って涼を捜した。

けど校舎が違うということもあってなかなか見つからない。

もう諦めようか・・。

そう思った矢先、涼が歩いてきた。

鼓動がすごくバクバクいつている。

一歩が上手く踏み出せないでいると、

涼と目があった。

心臓が跳ね上がりそうだ。

涼は知らんぷりして通り過ぎようとする。

ダメだ、このままじゃ、言わなきゃ。

「あのっ・・。」

「・・何？」

涼は振り向いて答えてくれた。

早く、早く言葉を繋げないと・・
この前みたいになっちゃおう。

でも口が思い通りに動かない。

「・・何でもないなら。行くよ。」

あ、涼が行っちゃおう。

早くっ・・！

「今日4：30になったら私委員会終わるんだ、だからもしまだ私を完全に嫌いじゃなかったら話があるからあの屋上に来て。じゃっ。」

「

私は一息で言い切ってダツシュで逃げてしまった。

息切れが激しい。

ドキドキしているのが止まらない。

でも・・言えたっ・・。

やっと言えた。

時間を見ると4：30まであと15分。

「委員会・・行かなきゃ・・。」

もちろん委員会での先生の話は右から左へ流れていった。

同じクラスの役員がもうひとりいたから大丈夫だろう。多分。

涼は・・来てくれるだろうか？

- 次回、最終回っ w

そのよん - 決意（後書き）

次回最終回っ

次の更新は6時間後くらいですw
w

その「-らすとw

「-ではこれで委員会を終わります。」

その言葉に弾かれるように私は立ち上がった。

周りの視線を置き去りにして、私は教室を後にする。

初めは普通に歩いていたらけどだんだん早足になり、最後には勝手に足が駆けていた。

狭い螺旋階段を駆けあがって扉を開けると

小さな屋上はいつものように風が吹き抜けていた。

時計を見ると4：29

あと一分だ。

私は秒針を見つめる。

あと50秒

あと30秒

時が進むにつれて鼓動が早くなり、

不安も濃くなっていった。

涼は来てくれるだろうか。

あと10秒

9 8 7 6

5 4 3 . .

パンツ

驚いて扉を見ると

「・・・涼っ・・・。」

ポーカーフェイスはいつも通りだった。

でも雰囲気は刺々しく感じる。

「・・・話って？」

涼は扉を閉め、距離を置いたまま言った。

やっぱり嫌われてるのかな。

でも、言わないと、私の気持ちを

「あ、あのさ。私、涼が・・・。」

涼にちゃんと顔を向けようとしたけど、ダメだ。

涙が勝手に出て来る。

「・・・やっぱり俺のこと嫌いか。」

「・・・え？」

顔をあげると、涼は背中を向けた。

「嫌いなら・・・無理すんな。」

ドアノブに手をかけている。

違う、そんなこと言いたかったんじゃない。そんなこと思ってない。

私は、私は -

「 - なっ!？」

私は後ろから涼に抱き着いていた。

いつもの私だったら有り得ないが、今はそれどころじゃない。

想いが、あふれて

「涼・・行かないで・・っ。私、涼が好きなんだっ。」

「・・・。」

涼の体に手を回したまま言葉を繋げる。

「私、初め自分でも何が起こったか分かんなくて、何か知らないけど、

涼の顔見るとドキドキしてて、どうしても顔が見れなくて・・。

でもそれは涼を嫌いになったんじゃない。

涼を嫌いになんかなれないっ。

私は涼が・・」

言葉の途中で、涼が私の腕を自分から離れた。

ああ、やっぱり嫌われたのか・・。

そう落胆していると

「・・っ!!」

大きな体に、涼に包み込まれた。

涼が私を抱きしめている。

理解出来ないでいると

「それ以上、言うな。」

「・・それってやっぱり涼は私が・・」

「違うっ!」

涼が初めて大きな声を出した。

私がびっくりしていると涼は体を離れた。

無言で見つめてきた。

あ あの時と、カメラから空を見てる時と同じ顔。
真剣な・・

心臓が激しく鳴っている。

目を反らしたかったけど、出来なかった。大きな手が私の顔に添えられていて、
見つめてくる涼の目に吸い寄せられるようで、

「いい加減
気付け。」

次の瞬間

私の口が、柔らかいものに塞がれていた。

「・・っ!?
ん・・っ。」

息が
出来ない・・っ。

「ふ・・っ。
・・っはあっはあ・・。」
涼が顔を離した。

今、何が起きた?
頭が動かない。
涼

何したの？

「俺だつて

お前が好きなんだ。」

「え・・・？

じゃあ何で避けたりなんか・・・。」

「先に避けたのは、お前だろ？」

あ そうか

だから涼は私から、

それで涼は私が・・・

涼の言葉を思い出して

顔が、また紅潮していく。

「涼は、私が、好き？」

涼はゆっくりと頷いた。

「ほんと、なんだな。」

「そうだつて。」

涼は呆れているようだ。

私には信じられなくて、このあとどうすればいいかも分からない。

「え、えつとその。」

どもっている

涼が

「先輩俺と付き合つて。」

ポーカーフェイスのままそう言った。

「は、はいっ？！

はいつ。」

しまった

条件反射で答えてしまった。

涼は、焦っている私を見て

「・・・ふっ。」

ほんのちよつと口角をあげた、

「先輩、もう一回していい？」

「え？何を？」

「キス」

くっっ！！

どうしたらこんな無表情でそんな恥ずかしことをさらりと言えるんだ。

「していいよな。」

先輩、俺と付き合うつて、言っただし。」

「ちよっ、ちよつと待て、落ち着いてから・・・」

「待てない。」

「ちよっ、んん・・・っ」

唇を押し付けられた。

涼の顔が目の前にある。

「ふぁ・・・んっ・・・。」逃げようとしても、後ろから頭を押さえられる。

体が熱い。

このままじゃ心臓が持たない。

けど涼は止めてはくれない。

何度も何度も唇を重ねてきて。
その度に私を見つめてくる。
その内溶けてしまうのではとさえ思った。

どれくらい経ったか、しばらくしてやっと涼は私を解放してくれた。
でも私は未だに涼に抱きしめられたままだ。
もう外だって暗くなってきた。

「かつ帰らないか？」
「もうちょっと。」

うつ。

涼が甘えてきたことなんて今までなかったから、どうも拒否できない。

明日から、私はどうなってしまうんだろう。

私達は手を繋いで赤い空を見ながら帰っていった。

「あれ、カメラは？」

私がいいつも下がっているはずの一眼レフがないことに気付くと、
また涼はポーカーフェイスのまま
「色々するのに、邪魔だろ。」

・・明日からポーカーフェイスを崩そうキャンペーンを再開しよう。

一瞬だったが

私が抱き着いた時、やっぱり涼は赤くなっていた。
よしこの作戦で行こう。

・ ・ 自分が慣れたら。

F
i
n

そのこ・らすとw（後書き）

なんだか最後だけおかしい雰囲気になってしまいましたが；w

まあとりあえず完結です。

変な文章で申し訳ありません；；

ほぼ趣味でやってますんで

（^^；）

暇になったら後日談etc
を書くつもりです。

最後まで読んで頂いてありがとうございました

m（—）m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3852m/>

カメラは嘘をつかない

2010年10月10日21時44分発行